

信念対立解明アプローチを基礎とした 異文化理解力涵養プログラムのパイロット実践

Experimental Study to Cultivate Understanding Attitudes on Cultural Differences

瀬田 和久^{*1}, 松田 憲幸^{*2}, 池田 満^{*3}
 Kazuhisa SETA^{*1}, Yuki TANIGUCHI^{*1}, Mitsuru IKEDA^{*2}
^{*1}大阪府立大学大学院理学系研究科
²Graduate School of Science, Osaka Prefecture University
^{*2}和歌山大学システム工学部
²Faculty of Systems Engineering, Wakayama University
^{*3}北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科
^{*3}School of Knowledge Science, JAIST
 Email: seta@mi.s.osakafu-u.ac.jp

あらまし：考え方の差を乗り越えて互いを理解する異文化理解態度を涵養する教育プログラムを、信念対立解明アプローチと呼ばれる理論を基礎において開発した。本稿では、この教育プログラムデザインの意図とパイロット実践した結果について報告する

キーワード：異文化理解態度、信念対立解明アプローチ、異文化理解力涵養ワークショップ

1. はじめに

我々は、メタ認知スキル育成の補助ツールとしての思考外化ツール「思知」を開発し、自他の思考に目を向ける教育を、医療従事者や大学初年次生などを対象に継続的に実践している⁽¹⁾。ここでは自己の立場や考えの前提を明確にすること、異なる判断指針に立つ他者を想定するメタ認知の実施が議論に先立って明示的に求められる。創造的議論における他者思考の推定の重要性に気づき議論過程でもメタ思考活動が活性化する効用が明らかになってきている。

文化的背景を異とする外国人との相互理解を伴う議論力(異文化交流力)を培うためには、(1)デリケートなことの議論を回避する日本人的精神性を変容し、対立の根底にある文化・価値観の違いに目を向け受容する心的素養の醸造、(2)過度に防衛的、攻撃的にならずに異なる文化的背景を推定・理解する思考とその伝達様式の鍛錬に資する教育プログラムの開発が重要と考えている。このために本研究では、(a)自国の文化、道德観、倫理観に沿った相手の理解では本当の意味での異文化間コミュニケーションが成立しないこと、(b)自分の思考の前提、判断の指針、異なる背景/前提に立つ対立する考えの様相に目を向けて明示的に思考することの重要性に自ら気づきその鍛錬へと動機付ける触媒として機能する新たな思考外化環境を開発し、これを組み入れた教育プログラムを開発する、

2. 信念対立解明アプローチ

京極らの信念対立解明アプローチ⁽²⁾は、構造構成学を理論的基盤とした信念対立解明のための方法論である。京極によれば信念対立は、「それにかかわった方たち自身の信念に疑義の余地を持たず、矛盾する信念に直面したがゆえに陥った泥仕合だ」としている。

京極らは、現象、志向相関性、構造の関係を明らかにした上で、この構造が成立する原理を明らかにしている。そして、信念対立の様相を解明し、自他の疑義の余地無き信念を揺り崩すことでこれを解消する方法論を構築している。

異文化理解においても、自分の思考の前提に閉じこもり相手の思考の前提を受容しない構造は、信念対立の内実は異なっても、この構造は共通であると考えられるため、本研究では信念対立解明アプローチを基礎においてシステムを設計した。より具体的には、解明フレームと呼ばれる関係性の外化フレームと、疑義の余地無き信念を揺り崩す問いをシステムに組み入れた。

3. ワークショップデザイン

図1に本研究で開発した情報システムの画面イメージを示している。この詳細については、辻川⁽³⁾に譲り、本稿ではこのシステムを組み入れたワークショップデザイン(以下、理解態度涵養 WS)について概略する。WSは、以下のプロセスより構成している。

WSにおけるステークホルダには主に、ケースライター(CW)とディスカッションメンバ(DM)がいる。WSにおいてCWとDMの立場は交代で担当することとしている。以下では、自身の経験をWSで議論する立場のCWの活動とその設定意図を述べる。

① 自己内対話(1)：自分が体験した外国人との対立を例にとり、自他の思考の前提、対立の様相を解明フレームに沿って分析する。【意図：自他の思考の違いにぼんやりと目を向けるのではなく、自分の思考の前提、自分が想定する相手の思考の前提を明示的に言語化して記述することで、それらの違いに分析的、意識的に目を向けさせる。】

(①'：DMに記述した事例の概要を説明する)



図1 信念対立解明アプローチを基礎としたシステム（解明フレーム）

- ② **自己内対話(2)**: 信念対立解明のための一般的問いを自己の事例にあわせて特化し, ①で外化した自分の思考を対象に掘り下げて分析する。【**意図**: 自分の思考にない問いかけが, 思考の深化, 拡大に資することを経験・実感させ, 疑義の余地無き信念を揺り崩すレディネスを高める。】
- ③ **ディスカッション**: 解明フレームを協調作成する議論目標を設定し, 他者と議論しながら解明フレームを作成する。【**意図**: 自分の思考と異なる他人の思考に触れ, 疑義の余地無き自分の考え/信念が絶対ではないことを実感させる。】
- ④ **振り返り**: 事例の再記述を通じて思考を振り返る。【**意図**: 議論を通じた自分の思考の変化に明示的に気づかせる。】

4. 異文化理解態度涵養ワークショップ

本研究で設計した教育プログラムの有用性について感觸を得るため, 大学生2年次生6名(3名×2グループ, 4名が外国人留学生, 2名が日本人学生)を対象にWSを実施した。ここでは, WS実施後に参加者に行ったインタビューの結果を一部紹介する。

- 1) 質問の具体化活動について
 - このボックスみたいなどころ(質問)を見てると, 初め書いた時には考え付かなかったようないろんな視点っていうのを得られるきっかけになって, それはすごくおもしろいです。いろんな考えがでたり, 自分の考えが固まってきたり・・・っていうところが, 面白いと思います。
- 2) 事例の再記述について
 - たぶん Backgroundのところ, あまり深く考えてなかったなあっていうことに気づきました。最初はただ周りのみんながポイ捨てしてるからって, Backgroundに関して思ってたんですが, その裏には〇〇君の言うように, 自分のテリトリーだけを責任もってきれいにし, 公共のと

ころは人に任せるっていうのも考えるようになりました。

3) 総論

- 僕は今日の議論で言ったことは, やっぱある問題に関して考えるときは, 自分の文化とかについて考えるのではなくて, 相手のことを分かったうえで自分の考え方と対立して結論出した方がいいんじゃないかと思うんです。だから, 今日の議論でも曖昧さとかに関しては, 自分がたぶん外国人としてだったら, 自分の国ではそうではないから, もう日本人はダメという風に思ってしまう。でもやっぱり日本人と議論することによって, なぜそうするのがわかってきて, その行動の意味が分かったうえで考えてみると, そこまでおかしくないなあ, むしろ自分の考え方の方がちょっとおかしいんじゃないかなあっていうところまで, 相手の行動のいいところが見えてくるんです。

5. まとめ

本稿では, 信念対立解明アプローチを基礎においた異文化理解力涵養のための支援システムと, 教育プログラムの設計について述べた。パイロット実施したWSは想定以上の手応えが得られたように考えている。今後, WSでの教育効果が期待できる学習者特性を明らかにするとともに教育プログラムをより洗練していきたい。

参考文献

- (1) 瀬田, 崔, 池田, 松田, 岡本: 思考外化と知識共創によるメタ認知スキル育成プログラム, 教育システム情報学会誌, Vol. 30, No. 1, pp. 77-91, (2013)
- (2) 京極真: 医療関係者のための信念対立解明アプローチ-コミュニケーション・スキル入門-, 誠信書房, (2011)
- (3) 辻川ほか: 信念対立解明アプローチを基礎とした異文化理解力涵養プログラムのためのシステム開発, 教育システム情報学会全国大会予稿集, (2014, to appear)